

(個人用)

行政視察等報告書（個人用）

令和 5 年 10 月 15 日

知立市議会議員 小林昭式 様

報 告 者	神谷定雄
日 時	令和 5 年 10 月 12 (木) ～ 13 日(金)
視察（研修）場所	八戸市公会堂・公会堂文化ホール
目 的	第 85 回 全国都市問題会議に参加
【概 要】 全国市長会などが主催する第 85 回全国都市問題会議が 12 日、八戸市公会堂で開幕しました。同市では初開催で、全国の市長や議員、自治体関係者ら約 1800 人が参加しました。 「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」をテーマに講演や活動報告を行い、まちづくりの可能性を探りました。 基調講演は東京藝大学長でアーティストの日比野克彦氏による「アートの役割ってなんだろう？」。 岐阜県の長良川の冬の風物詩ともなっているアートイベント「こよみのよぶね」、全国 28 地域に広まった「明後日朝顔プロジェクト」、熊本市現代美術館「アトラボマーケット」など、様々な事例を示しながら、人と人、人とコミュニティ、そして地域と地域をつなぐ場面におけるアートの役割を深堀していきました。 その中で、健康やウェルビーイングを地域や社会ぐるみで高めようとする「社会的処方」を文化・アートの領域で展開する「文化的処方」について触れられており、興味深い話が続きました。 次は熊谷雄一八戸市長による「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」と題した主報告。 多様で自主的な市民による文化活動を「多文化」と位置づけ、中心市街地活性化という地域課題に対し、意図的・段階的に行ってきた施設についての説明がありました。	

八戸市のアーカイブ、ものづくりスタジオ、インキュベーション機能や子育て支援機能も有する「八戸ポータルミュージアム はっち」、各種イベントやコミュニティスペースとして機能する「八戸まちなか広場マチニワ」、全国初の公設書店として注目されている「八戸ブックセンター」、美術館でありながら市民交流の場となる天井高 17 メートルのジャイアントルームと様々な機能に特化した個性的な個室群を擁する「八戸市美術館」など、魅力的な施設整備と丁寧な事業展開が確認できました。

続けて一般報告が 3 題。

文化事業ディレクター、演出家の吉川由美氏による「まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる」では、地域に資源を大事に思いながら、新しい魅力を市民とともに創りあげる・創り出すことの取り組みとして、「中心街をみんなの関心空間に」という言葉が印象的でした。

長野県東御市 花岡利夫市長による「標高差 1,500m の地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」では、オリンピック・パラリンピックを契機に整備した高地トレーニング施設の事例紹介がありました。

湯の丸高原の 1,750m という標高に専門家が着目し、施設のニーズについてアドバイスがあったとのこと。加えて「ケアポートみまき」を整備し、高地トレーニング施設で得られたエビデンスを地域住民の健康増進に還元する取り組みも行っています。

また、自転車のヒルクライムやクロスウォーク、などの高低差を楽しむイベントの活性化波及効果もあるとのこと。高低差が激しい地勢という弱みを、視点を変えて強みに変えた好例と言えます。

株式会社鹿島アントラーズ FC 取締役副社長 鈴木秀樹「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」では、国がスポーツ立国戦略で示す「する、見る、支える(育てる)」に加え、「稼ぐ」ができるのがプロスポーツであり、経済効果、人口動態、心象風景、QOL に大きな影響を与えることができること、またクラブが持つアセット(資産)を地域に還元し、持続化可能な地域づくりに貢献するという役割を示されていました。

現在は市民の健康づくりへの還元としてフィットネス事業、児童・生徒への還元としてプログラミング教室、食育キャラバン、キャリアデザイン教室、教職員向け講話、スタジアムやクラブハウスを活用した学校外活動への協力など、幅広く取り組まれています。

第 85 回 全国都市問題会議 2 日目。

「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」をテーマに、有識者によるパネルディスカッションが行われました。

コーディネーターは東京大学大学院人文社会系研究科教授の小林真理氏、パネリストは合同会社 imajimu 代表取締役の今川和佳子氏、拓殖大学商学部教授の松橋崇史氏、静岡県沼津市長の頼重秀一氏、京都府綾部市長の山崎善也氏。

それぞれの取り組みの報告の後、パネリスト間での質疑がありました。合唱に親しむ市民が多い綾部市では、山崎市長自らが参加しての変化を「井の中の蛙大海を知らず されど空の青さを知る」を引用し、ふるさとの魅力再発見につながったことを披露されていました。

スポーツのまちづくりを推進する沼津市では、頼重市長が課題認識した行政組織について、従前、スポーツは教育委員会所管で体育の領域をでないことから、これを市長直轄の産業観光部ウイズスポーツ課に編成し、スポーツを軸にした多様な連携が可能になったと言われてました。

また八戸ポータルミュージアムはっちの初代コーディネーターを務めた今川氏は、駅前のハコモノへ批判について問われ、以前は商店街が市に批判的であったが、それは要望の裏返しであり、市が新しいハコモノを作って何をしようとしているのかをアートイベントを通して可視化することが効果的だったとし、コミュニケーションの重要性を示されていました。

最後にコーディネーターの小林氏にも質問があり、文化施策は日常生活に必須なものではなく優先度が低いと受け止められているが、説得力の鍵は、と問われ、「その自治体ごとに強みは違うので一概には言えないが、数値などの KPI で見てはいけない」との答えがありました。

次に、現在の課題認識について、以下のお話がありました。(敬称略)
(今川)

アートの分野だけでは解決できない課題があること。やってる人だけで完結しては広がりがない。

(松橋)

公共性というものが伝わりきれていない。本質的な部分にフォーカスしながら、持続可能性を考えなければならないが、経済効果やコスパなどにフ

フォーカスしがち。

(頼重)

市の取り組みがスポーツにフォーカスされすぎて文化芸術に弱い、やっていないとの意見がある。疎外されていると感じている市民がいることが悩ましい。アニメについてはオーバーツーリズムが課題。

(山崎)

地域おこしの効果は数字で見れないが、自分がプロジェクトファイナンスの領域でやってきたので、常に数字でしか納得できない。税金を投入することの大義、納得感をどう理解してもらおうかが課題。

【所感、知立市政への反映に向けた課題等】

まず、1日目ですが、お話しを聞く中で知立市に置き換えて考えると、スギ薬局福祉アリーナやパティオ知立の課題に当てはまると思いました。学ばせて頂いた事は担当部局と調整して、知立市で少しでも実践できるよう進めていきたいと思います

また、様々な自治体の首長さんや議員さんと意見交換ができたのも大変有意義な時間を過ごせました。

八戸駅から会場へ向かう道中で、もちろん実践している八戸市内を視察できたのも良かったです。

そして、2日目のパネルディスカッションを通して、福生市の行政改革大綱にも掲げられている『共創』というキーワードが浮かびました。我がまち知立の文化芸術分野の施策展開に活かしていきたいと思います。